

里地通信 10月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：http://member.nifty.ne.jp/satochi/

連載：幹事紹介

我が町・熱海にて

大久保 幸夫（おおくぼ ゆきお）
株式会社リクルート地域活性事業部長



5年前、ちょっとしたきっかけで熱海に家を建ててしまった。元々は中央線沿線で家を探していたのだが、第1希望の国立でいい物件が見つからず、国立 銀座と同じ通勤時間で通える所がいいと思った時にたまたま熱海があったのだ。これまで東京から50分。往復とも座れる。家から海が見える。大型犬がかえる。温泉がひける。土地も安い。考えれば考えるほどいいことづくめのような気がして、ほとんど衝動的に決めてしまった。もともと、縁もゆかりもない土地である。

家のリビングにある3つの窓からは、それぞれ違った景色が楽しめる。1つ目の窓からは山の景色。春先の山桜、初夏の新緑、秋の紅葉。低い雲が流れ、水墨画の世界が繰り広げられる。2つ目の窓からは海の景色。遠くに初島、大島、利島を望む。特に初秋の海の色は美しく、月がうつる夜の海もまた格別である。3つ目の窓からは町の景色。網代の街並みの夜景や、夏は花火が楽しめる。

家が完成するまではわからなかった、この窓外の景色に私はたいへん満足している。衝動買いとはいえ、これはなかなかいい買い物をしたと思う。

しかし、熱海は毎年人口が減っている。一時期6万人近くいた人口も現在は4万4千人である。なぜ、もっと熱海に住もうという人がいないのだろう。不思議でしょうがない。熱海と言うと、人工的な海岸線と廃

業ホテルとバブル時の高いリゾートマンションのイメージが強いからだろうか。

これまたちょっとしたきっかけで、今年からは熱海温泉旅館組合のアドバイザーを仰せつかった。観光地熱海の再生のために力を貸せとのことである。私の考える熱海の根本は「熱海はこれまで自然の恵みをあたり前のものとして、あまりにも軽視してきた。これからは、改めて自然を保護し、自然を楽しむと同時に、都会的に豊富で選択可能なエンターテイメントがある町にしなければならない」というものだ。里地ネットワークの代表幹事である内藤先生の提唱される「環境保全型都市」である。

地域の活性化と自然環境の保全の両立というのは、まさに里地ネットワークの本質的な思想だが、私はまず何よりも先に我が町のこととして、しみじみと感じているのである。

経歴：昭和58年一橋大学経済学部卒。同年株式会社リクルート入社。Bing九州版編集長、とらばーゆ東海版編集長、企画室長などを経て、現職。UターンIターンBing、UターンIターンフェア、ふるふるネットの総合プロデューサーとして、UJIターントレンドを仕掛ける。また現在、大学における研究技術の民間移転機能（TLO）の研究中。広報システム研究会主宰、スマート・バレー・ジャパン（SVJ）実行委員、経済同友会労働市場委員会・企業白書編集委員会WG、経団連少子化問題WG、熱海温泉旅館組合アドバイザー、沖縄における情報通信関連の産業振興を考える会委員、日本観光研究会会員の他、国土庁山村定住委員会、人口移動要因調査委員会、経済広報センター・日本の針路研究会等の委員を歴任。編著に「ワークスレポート」（リクルートリサーチ刊）

里地セミナー報告

地域はどのようにすれば活性化するか

講師：長谷山俊郎
農林水産省農業研修センター 農学博士
開催：1998年9月18日（金）



私は、農林水産省農業研究センターで、農村組織と地域計画に関する研究を行なっています。全国の農村を歩き、農村地域の人たちはどうすれば元気になるかを調査してきました。今日は、活性化と効力感、活力を高める要因と要素について事例をもとにお話します。

1. 活性化を図る視点

< 農業・農村の後退を大きくした要因 >

第2次産業、第3次産業に偏重した経済政策と最近まで地域文化の推進に目をかけなかったこと。

農業政策は「生産」の視点が強く、「経営」する人に焦点を置いたものではなく、人の育成が極めて低かったこと。

地域と地方は異なる概念。東京以外はみな地方であり、地方は中央に従属した概念である。一方、地域はそれぞれ独自性がある。今日まで、地域を日本の政策ではあまり重視してこなかった。地域の文化を意識してこなかったことが、今日の「ひずみ」を生んでい

る。地域や農村文化に焦点を当てる必要がある。都市は優れているというのが今までの考え方で、地方はそれに従属とした中での政策であった。これからは、地域としての生き方を求めていくことが重要であろう。

< 活性化を図る視点 >

地域が活き活きする時はどんな場合か、逆にしょんぼりする時は、どのような場合かを考えてみましょう。人も同じで、人は恋愛しているときに元気になる。地域の人が活き活きとしているということは、活力があるということ。「活力」とは人間の願望を満たす行動をユニット化したもの。元気になる基本は願望。願望と行動が活力の基本。願望に基づいて人は動く。ただし農村と都市の人の活力のあり方は異なる。東京は、個々がバラバラであり、それぞれの人の願望が集まって、活力となる。一方、農村は、個々がバラバラではない。ある目標なり共通の方向性を持った時に活力が生まれる。

（朝市のおばちゃんは何故元気か）

小遣い収入だけでなく、客やおばちゃん同士のコミュニケーション、あるいは自分の作ったものが売れる楽しみ、自分たちのやっていることが周りにならんかの影響を与えていると言うところから元気が出る。経済的行為も元気の素だが、人間はそれだけでない。地域においては、他の人の影響を受けた場合にも元気になる。感性が一致した時にも元気になる。だから感性を引き出すことも重要。

2. 活性化が図られた事例

< 外部からの働きかけにより崩壊の危機からよみがえりを見せた：北海道幌加内町の事例 >

調査の依頼があり幌加内町を昭和60年の春訪れた。幌加内町は、日本最低気温を記録する気候的に厳しい地域。この町の人口は25年間で4分の1に減少し、3

分の1の集落がなくなった。この町村は今後どうなるのだろうかと当時考えた。1年くらいかけて、全集落をまわった。農協は既に倒産し、どのようにして再建するかを悩んでいた。約3000町歩ある農地は、半分が転作奨励金を得るためにソバに転作していた。働いて収入を得るよりも奨励金の方が多くなる。普段は都市で働いて、年一度帰ってきて、転作奨励金をもらっている幽霊農家が50戸くらいあった。幌加内の人にはやる気がなかった。できるかできないかは分からないが、とにかくこの気持ちを変えていかなければいけないと考え、後退から再生した東北地方の農村を見てまわり、「幌加内に欠けているものは何か」を考えた。高校教師など農業と関係のない人も集まり、会合を重ねた。これが意識を変えていった。拠点集落をつくって、自分たちで考えるようにし、3年目には米の1等米出荷が道内一位になった。米作に渾身に努力する人が出てきて、それが波及していった。アンケートを取って今後のあり方を考えた。ソバは加工して売る。北大の先生の指導により熊笹の和紙作りもするようになった。そうして平成3年に農協が再建。幌加内高校50人の枠に対して60人の応募が来るようになった。人口の急激な後退がなくなった。このことから共通目標を持った時に元気になることが明らかになった。逆に方向性を失った時、元気がなくなり後退してくる。

< 内発的発展を促す：山形県の小国町の事例 >

環境よりも「人づくり」を重視し、住民から意見を集め、それを課題化した。これらの課題を住民は数年かけて実行する。そしてまた新しい課題を出して実行する。これを繰り返している。また、利便性は行政が解決し、何人で食べるかは住民が解決する。その過程でいろんな構想が出た。拠点集落構想、緑地産業構想、ぶな文化ふれあい里づくり構想等。児童数が17人の時に、全国で初めてのコミュニティスクールを7億円かけてつくった。このようにして常に町は地域固有性を引き出している。ここでは人が来るし嫁不足もない。自分たちの住んでいるところを課題化させることにより、住民に主体性を持たせ、小国に住んで幸福だと思わせるようにする。また、行政内の人の移動をそれほどしていない。民間の導入も行なっている。住民と企業と行政による町づくりを小国は20数年前から取り組んでいる。小国の振興計画は、やる主体を明確化しているため、やる人に熱意がある。文化を踏まえ、交流を通

して地域は自立をしている。そのためには地域の主体性を生み、内発的発展をしている。こうして人口減少が低下し、所得水準が県内で最低からトップになった。

< 感性を重視した変化の創出：

栃木県大田原市「せせらぎの沢」の事例 >

ここは兼業農家の集落で、子どもが来て自由に遊べる沢を、5年かけて24世帯の農家が自らの手で造った。何故、このようなことを考えたかということ、栃木県の村づくり事業で、30万円をもらったが、24戸から6人が納屋に集まり、3カ月間かけて討議し発想の転換のある方向を考えた。ツマミなしで酒を飲み、酒に飲まれない様にしながらの状態、この飲み会を続けた。一人が綿密な記録をとっていた。このアイデアから「せせらぎの沢」を構想した。

目から上で考えることは理性の世界であるが、目から下で考えるのは感性の世界。シンポジウムは、「共に飲む」ということ。フォーラムは、十字路口ということ。つまり、感性の世界で考えるということが大事である。

< よみがえりを重視して変化を図る：

栃木県葛生町仙波の「そば店」の事例 >

栃木県からの予算をもらい、人づくり研修会を行なった。部落長らが集まり、その年に役員になった人、3集落の23人で、月1回の研修会を行った。研修会では、それぞれが自分の地区のことを考えながら20分間話す。話しするという事は、誰しも考えなければならない。これを2年間で15回やった。この結果、一般の人がリーダーに成長していった。仙波では、3食に1回はそばを食べていた。婦人の有志25人で、自分たちでそばの研究を行ない、高齢者センターを利用し、そば加工場を作り販売した。その時、やる気があるかないかを試すために、各自から3万円を出資してもらい、加工販売組織をつくった。

< 難しい課題に挑戦することも人間形成を

していく：三重県阿山町「モクモク」 >

効率化を推進する中で元気になった事例はない。地域の個性を引き出しアイデアを創造していくことが地域を活性化させてくることになる。三重県の阿山町の「モクモク」は農事組合法人で、現在20数億円の売上げがある。若い人200余名が働いている。自分のとこ

ろの麦を使って地ビールやパスタを作っている。ここでは手づみ野菜のしくみ作りを行ない、農場マーケット化を図っている。消費者が畑に入り収穫して、その分のお金を払う仕組みだ。その結果、消費者は、虫のついた野菜がおいしいという考えで、虫のついた野菜を好んで買って行く。

3. 組織のタイプと活力

活力ということ考えた時、組織には年齢があるということを知ることが大事。地域や組織にも、青年期、中年期、老年期がある。人間は自然に勝てずいつか死に至るが、組織の場合は、再度若返ることができる。老年期になったとき構造壊しを行う。組織を青年期に戻すことを行わないと組織は死んでしまう。

・組織タイプ

組織タイプにはピラミッド型とクッション型がある。ピラミッド型は活力を持たない。クッション型のように相互に影響しあえる組織にしておく活力をもつ。ピラミッド型の官僚組織はだめ。農村の集落は、近年このピラミッド型の組織が増えつつある。

・内発的意欲と「効力感」

効力感...自分がやったことを周囲に何らかの影響を与えているという実感。

内発的意欲...個人が活動に魅力を感じて、自発的にやろうと言う気持ち。

・「メダカの学校」と活力

スズメの学校 = むちを振り振り...

メダカの学校 = 誰が生徒か先生か...

誰もが先生にも生徒にもなり得る。これは互いに影響をしよう。また、指し手意識を持つ。組織はこのような状態にすることが重要である。

・大きい集団と小さい集団。

いっせいに「あーっと」声をだすと、一人一人が「あーっと」だすと、そのトータルの音量はどちらが大きいか。組織が大きいと、自分が手抜きしていいという意識が生まれる。15人~16人くらいが一つの目安。それ以上だと手抜きが生じる。特に婦人グル

ープが元気がいいというのは、このことがある。

・中心的価値と周辺の価値

中心的価値（組織の中心的考えや規範など）を明確化にし、周辺の価値（席次や服装など）を自由にすることによって、組織の活力がでる。

4. 活力を高める要因と要素

共通目標の明確化、役割分担、効力感をもたせていくことが、活力を高める要素となっていく。新たなる中核組織の形成も重要。このような組織は元気だが、基礎集団が連絡組織に変わると、活力がなくなる。部落組織（基礎集団）の上に、名称の如何を問わず推進統括する組織をつくるのが重要。組織活動を通してリーダーを育成する。組織活動がないところには、リーダーが育たない。相互信頼や、「共に」「一緒に」やろうという気持ちの培いも重要。

5. 公民館活動の意義

町村単位の公民館活動は、地域の主導で、上からの指示で行なわせる。そうではなく、地区や集落単位で活動する公民館が重要である。また公民館活動は「館」ではなく、「活動」をさす。

（茨城県美村里川地区の事例）

里川の活動は、日本の敗戦を出発点として、青年が自由に集まれる会館を造ろう、ということからおきている。それで、3年かけて、会館を建設した。30から40歳くらいの人が、役員となっている。この年代は、若年者にも高齢者にも自由にモノが言える。里川地区のアンケート調査では、87%の人が「活力がある」と答えている。何が活力を高めているか？相互の協力、相互コミュニケーション、若い人が自由に発言する場がある。50戸の集落に、30もの組織がある。一世帯平均5人で、人口が増加傾向にある。公民館活動による自主性と協力心の向上がある。自分たちの地域はずばらしい、と考えている。里川地区は山間地で、嫁問題がない。何故なら、それぞれの家庭に温かさがあり、その温かさが、青年の気質を温かくしている。青年も、家族も、地域も温かい人である。これが、かつて日本の農村にはあったんではないか。今の日本には、この温かさが重要だと思う。

6. 地域の活力向上の過程と方策

・地域の人が元気になっていくには、どうすればいいか。

「現実 意識化 願望 行動 効力感・充実感を持つ」という中で、活力は向上する。これを促すことが地域が元気になってくる要因になる。元気になると共に、地域が意識を高め、願望が生まれていく。現実から「どうにかしなければ」という動きをすることが大切。

・動機づけの方法

「相互啓発法」これはお互いが先生になって研修していく方法。

「忍び込み法」何度も足を運び、訪問し、だんだん入っていく方法。

「揺さ振り法」だれも取り入れない大きいことを話し、次に、30から50%くらい引いて新しい提案する。こうすると皆、考えはじめる。

・問題を整理していくこと

人の特技を洗いざらいだして、人名と特技表を作る。これから何ができるかを、分析して、方向性を導き出す。産業に結び付けていくためには、ニーズの把握が大事。

・自主性、主体性が育っていないと、だめ
少しでもいいから自由に使える金があることも大事。つまり、考える場をつくり、それを重ね、実行に結びつける中で自主性がでてくる。栃木の仙波やびわ池のせせらぎの沢などは、自由なお金から出発している。

7. 地域の活力が停滞するのは以下の要因が考えられる。

- ・時代のリーダーを内部から生み出していない。
- ・リーダーの加齢などによって、時代を見通した創造的中身入れができない。
- ・組織活動を通じた成員の自主性・主体性の形成が弱い。
- ・部外者の発想や意見を、かみくだき内部化して行く能力が弱い。

最後に、「地域づくりは、石垣作りと同じだ」といった人がいた。石には、大きいのも小さいのも、赤いのも、黒いのもある。そして大きい石を支えている小さい石にも役割がある。地域の人が持っている能力をどのように引き出すかが重要である。

お知らせ

ホームページのアドレスが変わりました

今後は、以下のアドレスにアクセスお願いいたします。ますます情報を充実させてまいります。皆さまのご感想をお寄せください。

<http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

(なお、これに伴いまして、これまでの準備用サイトは終了させていただきます。ブックマークの変更などをよろしくお願い申し上げます)

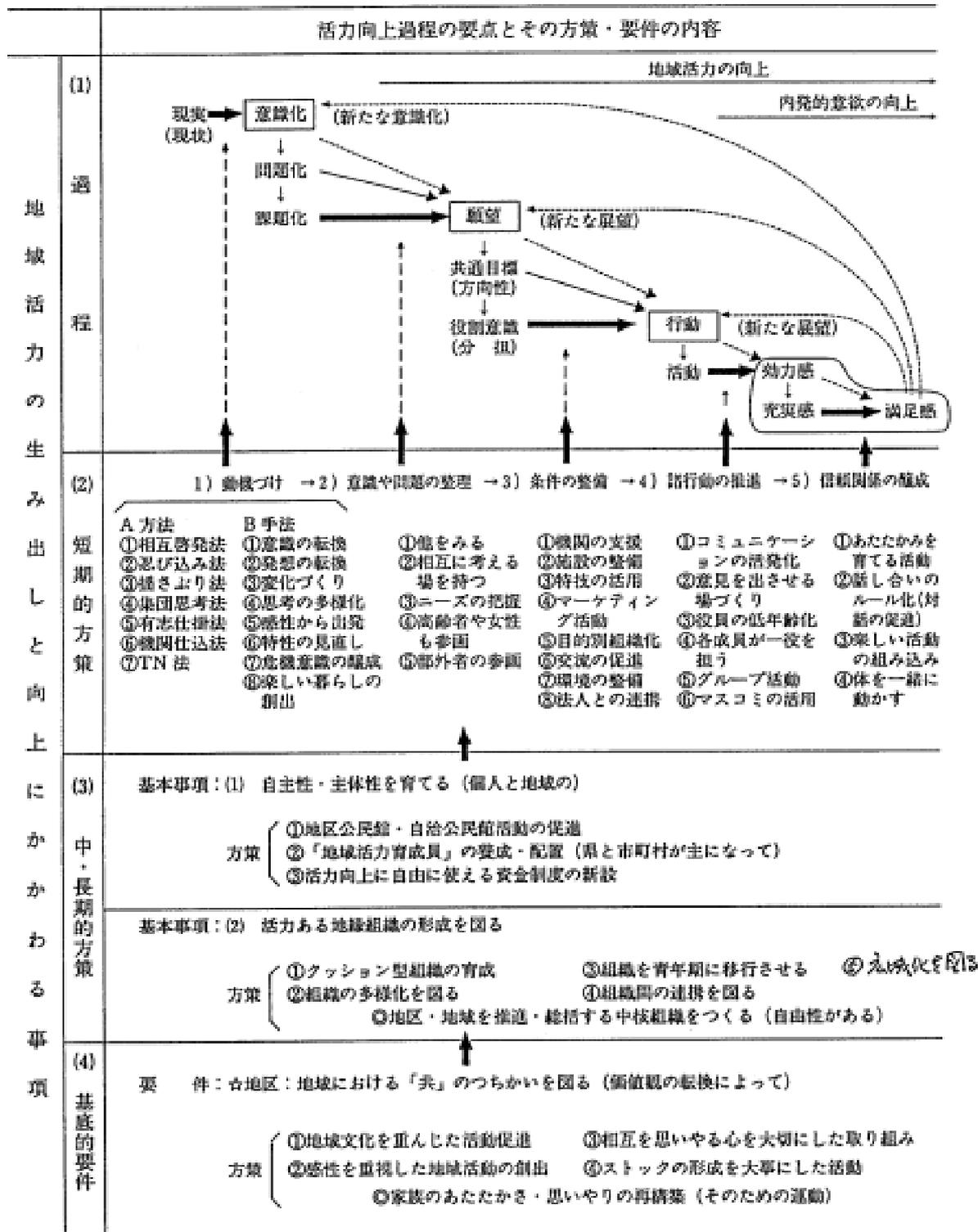
ご希望の資料をお送りします。

里地セミナーやシンポジウム等の資料や記録をご希望の方は、以下のものを添えて事務局に申し出てください。できる限りの資料をまとめてご送付します。

資料請求に必要なもの

- ・角2封筒...お届け先住所、お名前を明記してください。切手を貼る必要はありません。
- ・メモ...希望する資料の内容(セミナー名、日時、講師名など)と連絡先(電話)、ご担当者名を記入してください。
- ・切手...手数料・郵送料として会員は1回500円、一般の方は1回1,000円を承ります。相当分の切手を同封ください。

地域活力向上の過程と方策



注：◎印はとくに重要な方策

里地セミナー報告

外部参入者(ハビタント)と地域活性化

講師：河原利和

鳥取県智頭町地域づくりアドバイザー
とっとり政策研究センター研究員

日時：1998年9月19日(土)



本年7月まで、(財)環境文化研究所に所属し、さまざまな地域づくりに関する調査研究を行ってきました。現在は、鳥取県智頭町の嘱託職員として、地域づくり、計画づくりを行なっています。

10年以上、田舎(特に過疎地)を歩いていたつもりですが、改めて住んでみるといいところもあり、よくないところもあります。例えば草刈りをする時、蚊に刺されると免疫がないために地元の人より腫れてしまい体力のなさを実感します。都市に住んでいるとわからない部分が沢山あります。

智頭町の事例

智頭町は、鳥取県の東部、岡山県・兵庫県との県境の典型的な山村です。93%が山林で、ほとんど平らなところはありませぬ。県内では一番面積は広い町です。

それらを逆手にとって何かできるかと思っています。海の幸も山の幸もおいしいところです。地元の人

にとっては当たり前ですが、特に水のおいしさを感じます。ここはとても豊かな生活が実感できると思います。

ここは行政より住民のほうが元気のように感じます。今の町長は就任2年目に入り、現在町のビジョンを創ろうとしているところです。その方向を出すための手伝いをしています。

ひまわりシステム

ひまわりシステム(サービス)は郵政省のモデル事業になっています。このシステムは、毎日の郵便配達時に外務職員が配達中に独居老人の巡回サービスをすることです。これは、外務職員さんが声をかけていることにより老人たちにとっても喜ばれているようです。

日本^{ゼロ}分の^{イチ}1村おこし運動

また、日本0分の1村おこし運動も行われています。無(0)から有を生み出す意図が込められていて、まず住民一人一人の個性と価値を高め、自分たちで集落の計画を考え、自らやっつけようとして地域づくりを支援していく運動です。運動はまだ89のうちの9の集落にしか広がっていませんが、20くらいになれば成功だと思います。このシステムは村社会にとってはイノベーション(変革)であり、新しい村づくりをする規範づくりが入っています。これは地域内部と外部の事情に精通しているキーパーソンが一人でもいないとできないことです。また、内部の人だけでやると必ず行き詰まってしまうので、外部の人を受け入れる許容がなければいけません。

地域内に元々活動組織があってそこから0分の1運動が始まった地域、まったく無く始まった地域がありますが、これらを比較すると外見は一緒ですが、本質の違いがみえてきます。

小国の事例

これは地域づくりの一つの方法で、他にももっとたくさんあります。地域づくりに決め手はない、からめ手はある、と思います。

小国の事例は中山間地域の事例であり、10年くらい前から議論していました。中山間地域の手法ではあるが、地方都市や、大学のある町、研究都市など、人の入れ替わりが定期的に行われるところにも当てはめて考えることができます。

小国町は大分県と熊本県の県境。福岡から車で1.5時間。高速道路が整備されているので交通アクセスがよく、外の人間が入りやすいところでもあります。

豊かな自然に惚れて、来る人が多いです。しかし、ずば抜けて豊かな自然という訳ではありません。それよりも小国の自然や町づくりに対するイメージが先行している部分があります。これは小国の情報発信の戦略でしょうか。

昭和58年に就任した宮崎町長は名物町長です。役場の管理職が集まった中で、「町長はどの人ですか？」と聞いたら知らない人は必ず当たらないような容貌をしています。

人をよく見ていて人間観察力がすばらしいです。小国シナリオを作り、悠木の里づくりを行なっています。ここの総合計画は、5つのポリシーと29アクションのシナリオから作られていて、住民にも、外から来る人にもわかりやすいものを作っています。

アクションの一つに、ここは個人の誘致にも目をむけています。小国を気に入ってくれる人、問題意識のある人等に対して寛容です。外部参入者として、いろんなタイプの人が入っています。また、移住後に彼らが地域に与える影響を考え、適当であるかのチェックをする機関が、地域住民によりつくられているところもあります。

これらが、私が調査対象にした理由です。

ここで一部の外部参入者の実体を紹介しましょう。(スライド、OHPによる説明)

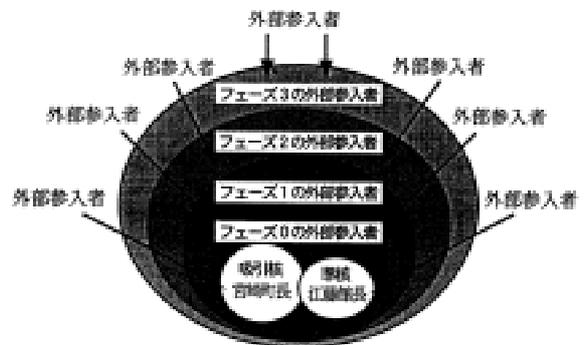
地域の活力とは？

人口が増えれば地域は元気になるのでしょうか？ その物差しだけでは説明がつかないことがあります。小国は人口だけ見れば徐々に減っている地域で、日本

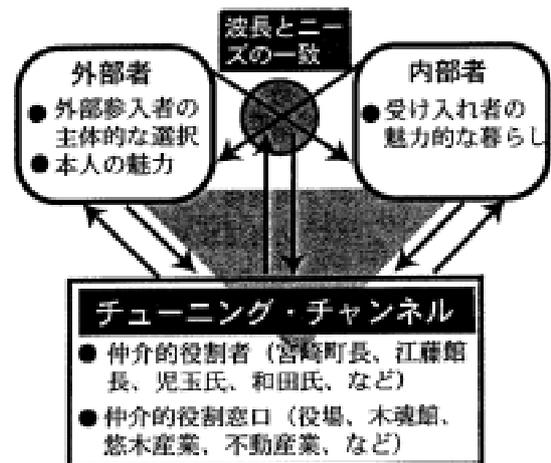
全体でも人口減少の予測があるのに、過疎地域の人口が増加することを前提にして考えるのはおかしいと思います。

また、外部参入者は国勢調査の中でカウントされていない人もいます。人口は頭数の論理であり、個性、地域の特性は「質」の部分です。これからは、そっち（質）の物差しも考慮していくべきだと思います。

また、いろんなイベントも開催していて、それに惹かれて入ってくる人が多いです。地元の資源の掘り起こしなども地元住民と外部参入者が一緒にやっています。



小国では、外部者と内部者をつなげる仲介的な役割である、チューニングチャンネルがあります。このチャンネルを通さないと、外部者は入っていきません。小国はこのチャンネル数がたくさんあります。



町長、江藤さん（木魂館館長）が外部参入者に対しての核となっています。さらにその人達の中核となって他の人が入ってくるような仕組みになってきます。

地域づくりとは自分づくりであり自分を磨くことで、独りではできません。相手と自分でお互いに育てあい、一緒に育っていくものだと思います。

地域活性化とは岡田憲夫先生(京都大学防災研究所)の言葉で言えば、覚醒化 葛藤化 攪拌化、の繰り返しでありこれはエンドレスです。また、攪拌されても覚醒される前の位置には戻らないものです。

また、活性化するときには何かやらなくてはいけないということを前提としているようですが、地域の人がそのままではよければそのままにしておいたほうがいいと思います。これをかき回したらかえってマイナス効果になってしまいます。

ハビタント概念

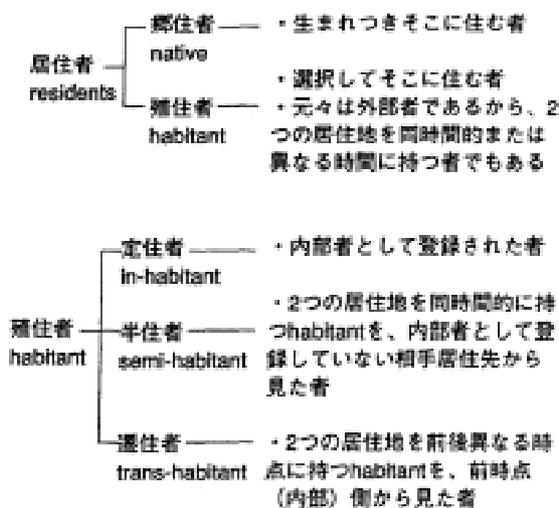


Figure 6. 居住者の分類とハビタントの定義

ハビタントという言葉は一般的ではなく、岡田先生と一緒に作った造語です。単なる参入者でなく地域のコミュニティーに何らかの形で影響を与えている人。ハビタント(habitant)は、『生息地、住まうところ』からヒントを得て造語をつくりました。

ハビタント概念と 交流人口概念の違い

- ・数ではなく、個性やかかげのなさを認めて大切にし、質で捉えています。
- ・地域に関わっている人は別であるが、観光客であるビジターは含めていません。
- ・居住地が時間軸上と、地理的空間軸上で捉えている。(トランスハビタント)
- ・2つの居所という観点から内部者と外部者のどちらにもなり得る。

最後に

内部の人が魅力的な暮らしをしていないと外部参入者は入ってきません。また、内部と外部の新鮮な両方の目が合わさって地域資源を見ることが有効であります。また、そこで特産品の開発、新しい産業創出等ができるのではないのでしょうか。

針の穴くらいの窓口をつけるために、内部の人にとって新鮮な目を持っている外部参入者は必要であり、内部と外部に精通している内部のパイプ(仲介的)役の人がいなければ地域の閉鎖性を取り除き、外部参入者を受け入れることは難しいと思います。

推薦図書

里地セミナーで講師をして頂いた長谷山さん、河原さんからのご推薦です。

『ひまわりシステムのまちづくり』日本・地域と科学の出会い館編 はる書房 2000円

『農村マーケット化とは何か』農村統計協会 長谷山俊郎 2000円

『地域活力向上のデザイン - その人と組織 - 』農林統計協会 長谷山俊郎 2000円

環境保全型里地づくり事例調査報告

Let's地元学

「水の行方とあるもの探しをしよう」 ～ 愛知県美浜町における地元学の実践 ～

地域資源調査でみつけた大きく赤い椎茸

愛知県美浜町における地元学の実践がスタートして、約2カ月が経過しました。(第一回は、里地通信9月号参照)

その第2回目(9月28日～29日)の事例調査報告です。今回も、熊本県水俣市で「地元学」を提唱されている吉本哲郎氏や同じく水俣市や三重県からの参加者が加わって、美浜町布土地区における資源調査等を行いました。初日から布土住民の方々の積極的な参加・発言により、厚みのある2日間となりました。

28日の会合では布土地区町づくり委員の方々が先頭にたって実施された地域の「あるもの探し」の経過報告(きのこ、植物、史跡など)をもとに意見交換を行いました。夜の部では、齋藤町長も同席される中、夜遅くまで布土地区の潜在資源の活用、活動報告や、今後の方針などについて話し合いました。

「いま行っている作業は、地元に埋もれているダイヤモンドをさがしていること」

「(先入観を抜きにして)布土にあるものをいろいろみつめてみよう」

などの住民の意見が物語っているように、地元による「地元学」が根付いてきたことを強く感じた1日でした。

2日目は、12月6日開催予定のシンポジウム打ち合わせと、子供を含めた住民参加による布土の森フィールド調査を実施しました。

内容

- ・布土住民による「地元学」の報告及びディスカッション
- ・孟宗竹林の視察と植物サンプリング
- ・地元資源の活用事例視察(杉浦さんの竹炭製造釜)
- ・布土の森フィールド調査(主にきのこ調査)



・12月6日開催予定のシンポジウム準備会合

地元主体による

「地元学」の報告(抜粋)

参加者：布土住民、役場担当者、地元学協会他 19名
・地元に住んでいても、住んでいる地域のことを知らないと改めて気づくことができた。

当たり前すぎて、目に入っても意識にのぼることがなかったとわかった。

外の人の視点からの気づきが必要。

・美浜は、海も森も川もある。昔から自然に恵まれていた地域。たとえば、戦時中は海岸で車海老を歩きながら取れたほど資源が豊かであった。

・必要なものを購入するようになってから、自然とのかかわりが少なくなり、生活の知恵がすたれてきている。

今回、その危機感を感じた。

・たとえば、地元主体の「きのこ調査」では、昔は食べていた「きのこ」が今はすっかり忘れ去られ、利用

もされていないことに気づいた。(例：イグチ類)

そして、食べられるキノコをよく知っているのはお年寄りだけで、現在、知恵の伝承がされていない。

・「何かをする」つまり「体験する」ことが大切。

自然の中での能動的な体験や学習が特に重要。

その活動の中で、次世代へ伝えるべき地元の文化・生活が浮き彫りにされてくる。

・活動を通じて、「よっしゃ、自分もやってやるぞ」というリーダーを地区からたくさん出したい。

「あるもの探し」ポイント (吉本氏の談話より)

・地元学における「あるもの探し」は、先入観にとらわれないで継続して実行することが重要。

・「あるもの探し」情報カードを作ることが「何になる」のではなく、「何にするの」かが大切。

第三者、傍観者になるのではなく当事者になること。

地元資源の活用に対する留意事項

地元の資源をとり尽くすことのないように、どのように考えるべきか。どの地域でも問題になることなので、環境に対する生活のルールを平行してつくることが必要。

フィールド資源調査

布土地区の小高い丘陵地でフィールド調査を実施しました。

森に入るとすぐに、「あっ、キノコ!」「ここにもあった」「そこにも」「うーん。これはたべられるのかな?」という声があちこちで聞こえました。

歩を進めるたびに歓声があがり、改めて布土の森の豊かさを全員で体感しました。特に、子供たちは大喜び。

この調査の中で、現代の子供は自然の中で遊ぶことが少なくなったことは、ひとつには私たち大人が自然との触れ合いを切り離すようなことをしている、そのように教育しているということにあるのではないかと問題を感じました。

布土の森の資源調査(主にキノコ)からわかったこと
・多くの参加者がキノコをはじめとする森の資源につ

いてあまり知らない(地元住民も同様、生活と森との関係が薄いほど顕著)

・森の使い方をよく知っているのは、地元の古老だけ。

・照葉樹林の森なのに、予想以上にキノコの種類が多い。

・「アカイグチ」など食べられるキノコも多い。

・ハゼ、アケビやどんぐり、椿の実など役に立つ植物もある。

・道具の材料となる蔦などの有用な木も多い。

12月6日シンポジウムに向けて シンポジウムのキーワード

・「自然と共生の町づくり」「自然なくしてこころなし」

・おいしい、役に立つ、楽しむ、遊べる、つくる、売る、拾う、食べる、知る(発見)、能動的な「シンポジウム」をめざす。

・シンポジウムは「成果」ではなく、「スタート」。

シンポジウムをきっかけに、地元による生きた「地元学」がスタートするんだと布土住民に投げかける。

展示、シンポジウム発表内容の調整

(展示品の例)

・水のゆくえマップ、資源マップ、ドライフラワー
・地元の人による「あるもの探し」「食べ物ごよみ」「花ごよみ」など

(発表内容の例)

・内からの発表

遠くからきたお嫁さん大集合など

・外からの発表

水俣からきた人から見た美浜・布土など

(交流)

・内と外の人の交流

地域の料理人など職人同士の交流の場など

(フィールドツアー)

・当日になって内容がわかるミステリーツアーなど

12月6日には、各種の展示物と地元による「地元学」の発表、この布土地区での調査を踏まえてこれから美浜をいかにつくっていくかの公開討論会などを行なう予定です。

シンポジウムの詳細が決まりましたら、あらためて里地通信でお知らせいたします。

イベント・募集案内

地球デザインスクール

京都府と宮津市とパートナー代表でつくる推進組織の共同運営で行われている地球デザインスクール。毎週末様々なイベントが行なわれています。開設1周年を向かえ、実験工房もでき上がりつつあります。10月23日～25日は、地元の人たちとの共同のお祭りもあるそうです。

どんぐり教室

どんぐりを植えて、あるがままの雑木の森を育てましょう。

期間：10月16日(金)～18日(日)

場所：府立公園予定地内&セミナーハウス

参加費：2,000円(宿泊費は別途)

申込先：電話 075-417-3147

F A X 075-431-8376(京都)

電話& F A X 0772-28-9009(宮津市セミナーハウス現地事務所)

E-mail earth-d@ja.so-net.ne.jp

詳細は、URL <http://www02.so-net.ne.jp/~earth-d/>に掲載されています。

玉川高島屋

木・糸・土に棲まう～現代の道具展

「塞の神」が、つくり手と使い手の市「文化の交換市」を結界した「現代生活文化の工房たちの市」である。里地セミナーの講師でもある今井俊博氏により行われる約40人のつくり手と道具たちの集いです。期間中はつくり手の皆さんによるワークショップとレクチャーも行なわれ、今井氏も「モンスーンアジアの素材と生活文化」を17日に行ないます。

期間：10月15日(水)～20日(火)

場所：玉川高島屋 6階

水俣病センター相思社

みかん販売および事務作業募集

水俣病を越えた新しい水俣の創造を模索している水俣病センター相思社では、低農薬みかんの販売助手および資料整理など事務作業の募集を行なっています。

期間：10月20日～3月10日の約4カ月間(宿泊施設有)

(時給650円 要普免)

問合せ先：水俣病センター相思社 遠藤 電話 0966-63-5800 まで

日本野鳥の会

第2回 甦れ!里山シンポジウム

里山とは何か? の再確認から、保全のための問題解決の方法の検討まで、里山の自然に関心のある方、保全活動を行なっている方など、様々な立場の人が集まり、議論を深めていきます。2日目には里地ネットワークも赤目の森とともに参加する予定です。

また、団体の活動紹介やPRの場として、ポスターの出展団体の募集も行なっています。

期日：11月7日(土)～8日(日)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)

申込先：(財)日本野鳥の会シンポジウム係

電話 03-5358-3510 F A X 03-5358-3608

参加費：1,000円 交流会費：4,000円

里地セミナーご案内と募集

「日本の民族文化を伝承する」

日時：11月4日（水）17:00～21:00

場所：民族文化映像研究所

（営団地下鉄丸の内線「新宿御苑駅」徒歩3分）

参加費：会員500円 一般1,000円

定員：20名

講師：民族文化映像研究所

所長 姫田忠義

民映研では、「私たちが生を承けた日本列島に生きる庶民の生活と生活文化を記録する」という立場で、30数年の活動の中で100本以上の映画を制作してきました。

私たちが捉えてきた「庶民の生活と生活文化」には、共通して、自然との深いつながり、深い対応を捉えることができます。

記録とは、先人へのささげもだと思っています。先人が築いてきた暮らしの仕組みや精神文化を捉えるには、それを受け継いできた人と事実に基づいて学ぶ

ことが大事だと思います。そういう立場でこれまで映画を制作してきました。そして、この取り組み方により、「基層文化」を理解する大きな力になっていると信じています。

例えば、焼畑の記録を撮った高知県池川町椿山では、雑穀主体の焼畑作業を営々と続けています。民映研では、椿山の焼畑を中心にした一年の生活と人々の生きざまを、4年間にわたって記録しました。椿山には、昨今の日本人がややもすれば忘れがちなものが多々あります。例えば、明日への備え。各家の倉には山と積まれたヒエの俵がある。ヒエを必要とする時代は過ぎ去ったのに、です。そこには焼畑を軸にしたこの社会生活の基礎単位を捉えることができます。

「椿山 焼畑に生きる」(1977年、95分)を観ていただき、映画から地域の「基層文化」をどのように捉えられるのか考えていただきたいと思います。自然に根づいた人の暮らしの仕組みや精神文化を捉える手法を考えてみませんか。

申込みと問合せ

セミナーのお申込みは、巻末の申込用紙をご利用いただき、FAXにてお願いします。
お問い合わせは、里地ネットワークまでお願いします。

⇐新宿方面

○ウェンディーズ

地下鉄丸ノ内線 →◆
新宿御苑前駅・新宿門口

⇨四谷方面

角から5軒目
のビルの2F →◎

○堀内カラー
○ふうたろう弁当

新 宿 御 苑

「モンスーン・アジアの 里地と里山」

日時：11月6日(金) 19:30~21:30
 場所：「ゆうど」(JR目白駅徒歩5分)
 参加費：会員500円 一般1,000円
 定員：30名
 講師：ユーラシア・クリエイティブ・ジャパン 代表 今井俊博

モンスーン・アジアは湿潤の国、そこには森林と稲作水田が広がっている。活発な水めぐり(循環)の世界。人々はそこに生活の基盤を求め、共生のノウハウをつくりあげて来た。

5月下旬、ヒマラヤをめぐる大気循環の仕組みが変化して、突然の Burst。雨季の到来である。西はガンジス河(ブラマプトラ河)からイラワジ河、メコン河、そして、長江に至るまで、ヒマラヤの万年雪と雲南に降る雨を集めて、流域の里地、里山を灌漑するモン

ーンアジアのなりわいと生活文化。

そこには、私たち日本の農村社会に共通したものがある。

その共通したもの(文化)が、今どのように転換し、残り、また滅びようとしているのか? いくつかの先住民族の森と里に存在した歴史に学び、今起こっていることを考える。

サラワクのプナン族とイバン族。北タイのアカ族やカレン族。ジャワのプカランガン等々。

翻って国栄えて山河なし 捨てられた土地(水田、桑園、雑木林、人工林)の再生について。

今井俊博は1926年生まれ。東京大学文学部卒。(有)ユーラシア・クリエイティブ・ジャパン主宰。都市社会におけるライフスタイルの変容に関する調査を手がけ、次第にその対象領域をモンスーン・アジア全域に広げた。同時に環境問題、また文化産品開発にも取り組んでいる。ギャラリー・スペース「ゆうど」は昨年12月に、作り手と使い手の文化交流の場としてスタートさせた。

申込みと問合せ

セミナーのお申込みは、巻末の申込用紙をご利用いただき、FAXにてお願いします。
 お問い合わせは、里地ネットワークまでお願いします。



事務局日記 98年9月

9月5～7日

第4回農村交流ネット「21」の集い

「中山間地の振興はどのようにすれば図れるか」というテーマのもと、長野県三水村と四賀村で開催されました。全国で活躍している人が100名近く参加し、斑尾高原牧場、アップルさみず新流会の活動、四賀村クラインガルデン等現地での視察、交流会、長野を中心に、各地でのユニークな取り組みが報告されました。そこには単に「食料を生産する」という姿勢ではなく、「顔の見える関係」を生産や交流を通して行ない「食の安全性」や「活力のある地域づくり」を行なっている元気な方々の活動が見られました。

9月11日

進化する企業緑地研究会第4回見学会

工場緑化法に伴い、工場内における緑地について考えよう、という目的で組織されている進化する企業緑地研究会（事務局、住友会場リスク総合研究所）。中部電力^(株)新清水火力発電所、焼津市^(株)山川自然生態観察公園、サッポロビール^(株)静岡工場、の3カ所で行なっているピオトープ復元を見学しました。

教授と共に実験的に行なっているところ、地形を利用してつくられたところ、趣味の延長のような形で発展しているところ、と様々でしたが、芝生や林の広がる緑地よりも様々な機能を持った多様な自然の方が、人間を含めた生物、地域にとって有効であり、この様な取り組みをしていく企業がこれから増えていくのではないかと感じました。（源氏田、原田）

9月11日

米沢郷牧場22周年記念シンポジウム

「私たちの自然循環農業集団 リサイクルシステム」参加

平成10年度の環境白書でも取り上げられている伊藤幸吉代表が率いる米沢郷牧場の記念式典に参加してきました。環境庁、農水省をはじめとする700余名が参加し、有機農業運動の中核を築いた人々が一堂に会しま

した。加藤登紀子、岡林信康も、ともに、農業や生活を考えてきた親友として参加していました。シンポジウムでは「米沢郷牧場のこれまでの歩み」「BMW生物活性水の中核技術」の講演、そしてパネルディスカッションでは「どう拓くこれからの農業」と題して、さまざまな方々からお話をいただきました。残念ながら、今回のこのシンポジウムは、これまで米沢郷牧場と関わりをもった人のみが対象となっていたため、事前紹介はできませんでしたが、当日の資料はありますので、関心のある方は事務局までご連絡いただければ郵送いたします。

（事務局の竹田は、かつて、有機農業運動組織「DEVANDA事務局」を担っていたため参加をさせていただきました）

伊藤幸吉さんのモットーは、「あらゆるものを循環させることから農民の自立がはじまる」そして、このことを22年間にわたり実践され現在では、270名の生産者グループの代表をされています。（竹田）

9月18日、19日

里地セミナー（本号掲載）

9月24日

グラウンドワーク協会訪問

「里地」と「グラウンドワーク」は設立時から深い関わりがあるのではないかと考え、グラウンドワークの千賀先生がセミナーを行なった際、今後の展開について協同でできることは行ないたいですね、という話をしていました。今回は双方の事業計画を確認すべく簡単なミーティングを持ちました。今後は、里地の学識経験者、メディア、市民参加型の行動力とグラウンドワークの理念と組織力を合わせた展開も模索していきたいと、里地事務局の竹田、源氏田は考えております。

9月28日～29日

愛知県美浜地元学調査（本号掲載）

10月2日～4日

エコ水俣フィールドツアー & 里地づくりシンポジウム（11月号通信で報告）

10月7日

環境庁行政担当者と

環境庁環境研修センターで「環境基本計画」に携わる

行政担当者を対象とした研修会で、「共生（環境保全型里地づくりの実践）」に関するお話をさせていただきました。

設立時から今日までの活動から得られた資料を整理し報告いたしましたので、今度、皆さんにも直接報告させていただく機会を設けようと考えています。その時は、ぜひご参加ください。（竹田）